

花街百人一首

全



花街百人一首序

壺中乾坤あり。命吉原といふ春と
櫻を植ゑ。花は盛れ爰に移し。わ
花と色香を争ひ。殊に又燈籠俄の詠あり。
不老門前逢門と称へ。春秋富りといふ全盛
遊びは支多るとや。馬鹿らへ晦日も満月
出づ。暗の夜も吉原を月夜可ぬ吟
あり。後朝の雞四角なる卵と産ども。人更
珍とぞ。色は丸なり。人體を造り。是に

加ふ浮氣交り。あつちを常と。堂々
男子をも。團子の如く取扱ふを慣れ。これ
客も亦角とれ。圓く成る。遂に粹に至る者
不少。長袖能舞。多錢と賣の謂あり。嘗て
り。色は世の中浮氣の浮世といふ。他は此廓中の
別称あり。変明け

安政三丙辰の初春恵方に向く

東紫君の名代をつとめて

年増の新造識





其項の若士
 馬を吉原へ
 通しとて
 瀬草に馬道
 の後残せり



百目

三

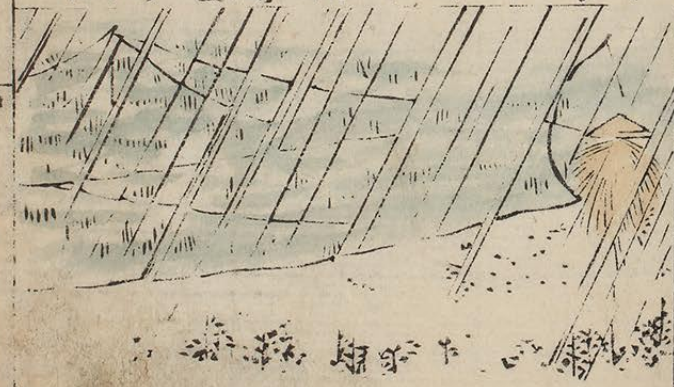
陰陽和合の始



九男女の情慾の起る所を天地月日の妙理に
色慾煩悩とて釈氏の教ふる所の眼宗の教
念を以て意中清淨なる所を悟るの異教を
生じ信するの男あれば女あり陰陽相會するを
て天地の生する男女の情慾を天地の交の會の縁の
る人同様の難く附へ日月晴雨にて雲を以て
男女の情慾を生ずるの天地間を雲を生ずるの
を施す万物生るに如く孫無用を男子の妻を
と愛し婦女の男を以て人は自然の道理生る
の大なるうづりやさればよく心中に色慾の起る
附の天地の間を雲を以て生るを以て天地の
齊く是れ万物の生るを以て遂に天地の

萬物生育

時情慾の隆るるも春夏の雲雨の多れに因り
 く老人の陽氣かゝりて情慾の弱く多し秋
 その晴天の如くさうさるが如く中右より情慾
 ありて色慾は謹むものなり人々多しある者多
 れども原素格の中より仁が五常成りたるへ
 生る者へのあはれ父母をえて是れ知り神を信ず
 學ぶ人より卑の隔はあれど時をれば多しは拙
 あるの色慾の厚るるより深窓の裏より月ち幽々の
 者へ受るる御うきおどけは口々にもお遊ばせでもよ
 藪でも色慾づくるあはれず維新もあられを細の
 ふちを生るる数も花咲て雲成落ぶ水魚のつる利用して地
 衣は衣を着せは衣を脱れは衣を脱るるを地衣と云は



五代高尾

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

上多き後ちんふ

ろくやわきん

五代高尾

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

五代高尾



大條高尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

六代高尾



大條高尾
の尾あり

七代高尾

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

上多き後ちんふ

七代高尾



八代高尾

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ



九代高尾

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

九代高尾

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

上多き後ちんふ

九代高尾



高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

高尾の尾よりあさの
いふ大別の人をいふ

享保十九甲寅年（一八三九） 九月
二本あり二本小尾あり
一本小尾ありて揚子江の
虎ありや萬年十月九日を
うりさうにとあるは又同二十
板本四條名美ありあがき分虎
城也高尾ふたなる由ありと
あるれば高尾享保十九宮
十月に果しとありてつづき

出典は、その『岩崎氏文』と云ふ
書、ある人あり、源と云ふ其後
の細見と紀と云ふおのゝ尾に
居るは、十一代にて終るは、三
王より、宝曆六年の細見
紀におの花ふ三南三有三同七
年の細見花ふ三む三か三江
う三なる三 宝曆六年の

之浦屋之りし

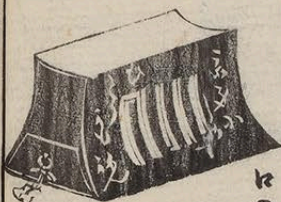
高尾野道
兵水入の図



裏く如け
紋入り



三浦屋^{三浦屋}なる抱^抱の遊女^{遊女}
あり尾^尾あ^あく金^金盛^盛
のを^{のを}より菱川^{菱川}作^作佐^佐抱^抱
女の^{女の}画^画より尾^尾房^房雲^雲の^の
まが^{まが}死^死てあ^あく^くの抱^抱女^女い^いか^か
を^をと^とり^り金^金銀^銀す^す之^之辰^辰年^年六^六月^月
辰^辰六^六と^とり^り者^者殺^殺而^而今^今然^然出^出して
抱^抱引^引を^をと^とり



けのうら
 けのうら
 茂雲

洗ひ髪ふ他羅をさるゑめ
枕なり金銀の簾うひあそ
一眉の影を藤絡ふ志う
志乃ふんは枕ふ
のあうの里番成
我乃ふあう
ひとりのも縁ん

薄雲

その傳美ありてや
今も
人事の人の中つてを
衆のその変あり申もあはし
く是よりむううと
富の廓ふむびるひも
とよりとおかぬ今も
雲泥のふび
あるを

奥州



○興明
若荷^{わか}岳^{がく}の抱^{かか}抱^{かか}女^を寛^{かん}文^{ぶん}
の^の金^{きん}盛^{せい}ふ^ふて^て共^{とも}名^な一^{いつ}
時^{とき}ふ^ふる^る——お^お抱^{かか}灯^{とう}の^の火^ひ袋^{ふくろ}ふ
貞^{えん}清^{せい}美^み婦^ふ胎^た
虚^{うつろ}言^ご偽^ごり^り
この文字^{もじ}は^はく^くせ^せふ^ふと^とぞ
ね^ね花^{はな}堂^{どう}成^{なり}ま^まび^びて^て能^よ女^を
其^{その}以^{もつ}の^の附^つ合^あふ
そ^その^のく^くせ^せふ^ふれ^れく^く



とあるが、
 奥の山、
 ひまわり、
 木の葉、
 もや、
 ひまわり、
 のち、
 とく、
 急、
 なけ、
 奥、

○勝山

山が芳洞が抱の抱女を
宝永三丙戌年 土月 土日 去
の月 小出より其日のうちに
運搬する金糸糸で一筋の
おをねとせり

妹背山より川
流るゝの地いへ

ぬれり

礼部通達して風を
好む盤の風ふ勝山橋の
一源河津より又寛永の
京四条の東に女を舞妓
わし小島田吉といふ
女は偏の工女といふ

それより島田といふ
令よりとど

○常盤

是より小舟芳順が
抱の抱女を其以勝
山と勝山とありといふ
金盛より

おひのり

からせ人あふ
あのがれ
あーりれ

抱女
と死

○濃紫

上浦屋の抱女より
濃紫の二代の濃紫より
二世の約束ふけて
後勤の多の年
月分小比翼舞の



○雲井

同三浦屋の抱女より
雲井の抱女より
八月十六夜ふあめ人のあふり
る時



の縁よりふえり
るに中くふあめ

雲井

ひとを病の掬の

ちのつと

あやどめお城のさきよりうね　丑屋内　玉菊
 菖蒲遊花とてに糸草の津端の水調子といふあり其碑さきの夏の世の中
 ると酒のみ小園で水なり今いとうむ仲の丁の盆燈籠の竜の始りとも仲の丁俵
 屋虎文揚屋丁ね屋八三　あ人登をめて催しうり　いと云物よ京保土丁未年六
 月廿五日法名菊親王信女廿六歳法草新堀永見寺に墓あり而も余
 年の入りあひまを連綿と續きこと玉菊が巧なり
 惣か龍ふたりに玉菊がくちり夜におつて向あり

○元吉原開発の古

玉屋山三郎内

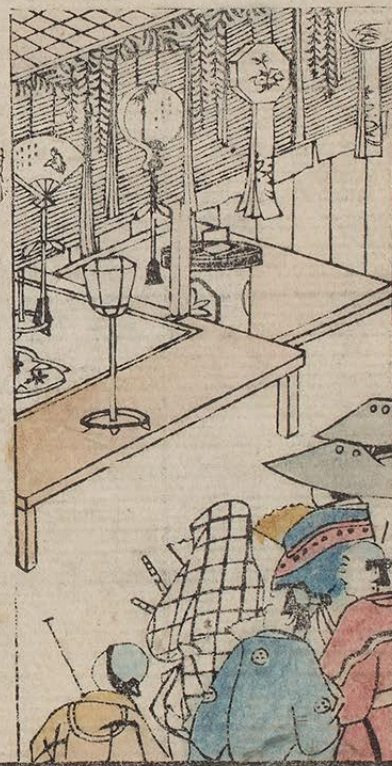
張東之

若妙

慶長に昔八領城町と
て定まりたる所多く只
二町二町と布くあり
その中に都を置く所を
あつた所と布くあり堀所
八丁あり十丁あり又堀倉
お十六六町大堀堀所に
女堀ありとありこの大堀
と布く今とあるの常盤堀の
古堀あり堀の太本二本
あり由急堀所とあり更
ふりけ堀所と布くあり
江戸出立者あり堀倉

草ハ
虎ノ
鬚
アリ

卷一



此の者どもへ大いなる
 勢を成さるる後には
 所よりありすこと
 の者ども京都六条の
 所よりありすこと
 伏見及び大町
 此の者どもは
 慶長十年の
 所よりありすこと
 所よりありすこと



河其外へんさるる
 此の者どもは
 所よりありすこと
 所よりありすこと
 所よりありすこと
 所よりありすこと



[illegible]

のづけへ木の花を
 物^{もの}も枝^{えだ}もどけなく
 入る者^{もの}もどけなく
 あり又やうな
 よりおろ物^{もの}て商人
 と^{いふ}人^{ひと}ありあ^あ揚^あと
 して^{いふ}遠^{とほ}と^{いふ}客^{きやく}人^{ひと}
 も入^い用^{よう}なりほ^いぜん
 の^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^い
 あり又^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^い
 夜^いも^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^い
 りあ^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^い
 あり又^いつ^いつ^いつ^いつ^いつ^い

岡田樓内

谷の
戸と
も

中万字樓內

け 志

37

18

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

いり（散茶）茶葉をうす
つがひるゝゝ名目へあれ
もも今のりのおしめ
る那のけうろくおまを
し腹張のけりうろく
もおれハ繁昌の地の
多ひあてきのかの流
みおあてきあすも又
いりありやももろり
あてきうろく名目と
かてきんとのありと
つるじハ名目茶を
おてきありとてつる
おれいしおれとてい
る



いりてとてとてとて
おれいしおれとてい
る
ももあてきあすも又
いりありやももろり
あてきうろく名目と
かてきんとのありと
つるじハ名目茶を
おてきありとてつる
おれいしおれとてい
る



大々廿年と大門寺のふ
りり元々一（由）と
いふ是とこの時のふを
あうやうあることとふ
ひやうふんきく皆その
まじらうてそれもと
おほくおほりのありし
ありとのありはるはる
ふふあふふえ祖中村
七帝と云ふは後者丹
前と名づけ六法成ふ
り丹前書成ふ文はに
めしとありとの時のふ
のふのふふふき成

ふよりて少いづの異同
 へ有ども女弟ども疾
 るるをたそぐれとひく
 るたの姉妹あり
 疾出揚めの合掌れ
 拍子来る敷病も
 何とてとととととと
 りる疾ひるせも疾
 別臺をのぐ又まうと
 り今いつととわりて
 疾も疾のつく者も疾
 れと花女も疾とととと
 りてみる疾もありとと
 まる疾のと疾せんあ
 せり芝居の写る疾

[illegible]

金子伊勢屋六兵衛内

大淀

[illegible]

五番目

花紫

居つけの夜若

あそびせうし様うき

中道に在り

東人

あそび花ととも

あそびあうとらうし

いしを肉

常夏

愛うもあがり

様

松葉屋内

漆之助

室短もあがり

仲の町燈籠の支

室家の以万字屋の控

女ふ室家とて評判も

き屋をさる者あり大

酒を好み客所よりあ

るを妙とて金銀を

らぶりのほ同六己丑の

年秋七月五日酒のふ

あせ二才うて世間あり

せり常々交りやれ者

ともなげきやるを

仲の町燈籠虎文揚屋

の着うけてお菊と入魂

甲子樓内

夏あうとらうし 吾妻

夜の若

風う花あうとらうし



うたあうとらうし

浪の歌

谷本屋彌助内

美雪

あそびあうとらうし



あそびあうとらうし

あそびあうとらうし

くさくさや毎々くさくさ
 けしき永代のこころあり
 りるとあり

元郎助指荷の吏
 並 祭禮俄の吏

けしきを元吉宗園祭の
 所共迎ふありー綱あり
 鳥居千葉九節助と云
 の地面ふ觀望して
 田代の堀ふありー忠志
 田の畔いありーしつとく
 豊熟を結ふふ靈
 豊一々いんばるやま

のあけつとくめきある
 移りありし時系ね移る
 山(波めえ又二位一
 一ーみすまの法
 是才(土地の史)とあり
 世のひ男女のふね候
 橋びのふと人皆候
 せりふありし祭
 祭もあつ八月上の午
 町ありしがおろし朝日
 小あつる年より移り物
 をあしき結文あつし
 さればあつとありて延
 喜あつる延のけり上
 の大観りありと被地

久喜万宇屋内

雲々々々 唐土

遠くかめく

ゆゑの



源
 夏れ秋の服

金屋油き内

豊浦



服
 門の戸

きゝあか

りねを

あ鶏のこもく

おれねの垣

中を功絶あるお氏社の
 物しきふゆしきり香板
 の文家へ天候の御筆
 あり今ふおれりもあ
 うらうらよふは
 の仲の丁作村佐野橋が
 まええ
 花菱餅のふゆ丁二
 丁目万屋をうまとり
 者エ夫一始めゆへある
 とむありてまた一あり
 次ふ又最中の月とふ
 名氏動し時をいふ
 ありある人ときをせ
 多くあるおの家と月と
 合けるもあきあき



政田屋勝次郎内

あり時代最中の月より
 るひあり文化のた
 め作田の某ふふ某
 だふふふふとて
 名あり
 〇山屋をふふ揚玉丁
 山屋市をふふ製茶する
 あり大芝の極品を
 して芝の産品とれ
 又お茶揚とてゆげの
 最上るふふ製茶
 〇甘茶お茶の松屋を
 自り制茶してむしり
 昆布茶の松屋を



有り清々葉はすえんや
 久々清々はむとら
 今ハ茶店一統のりや
 路一々ばとどもる
 持雲する成る者も
 色

大盡舞唱歌の支

ひ大そ炸の小唄ハ草
 條の以二其邦きえが作
 有りといふ中村吉美を
 江戸平舞妓奴若中
 声よく小唄の上より
 上西徳中の家小吉
 系連名村といふ小吉

みええりや女はさう
 女はありきふふ古
 小唄のいふやうに
 大そ炸のいふやうに
 年の昔を思ふやうに
 故馬亭馬老人の如
 ありき物成るやうに
 世ふ多き物やうに
 少好むの君をばふ
 たりやれ
 大そ炸
 小唄のいふやうに
 ふろこれやふふ
 江戸平舞妓奴若中
 声よく小唄の上より



此のふざう防金^{ヒエタウザン}の
 とうれん坊^{ムネ}は名譽^{メー}
 ありふさの坊^{ムネ}の
 長をとりされれ孔子^{コングー}
 のさうりツトセううに
 我^{われ}成^{おん}をさうおまハツトセ
 かるに悪^{あく}にやれん
 ものわくホジ^{おん}
 まく^{おん}のさうりツトセヤ
 一^{おん}アリヤチナ
 西^{おん}の^{おん}の^{おん}の^{おん}
 り代^{おん}とてあてられか
 あり大^{おん}の^{おん}の^{おん}
 ナアそのつれの大^{おん}

[illegible]

平野屋龜五郎内

花の戸

君成之

かき

かみ
そめて

3

忠貞

乃其

三浦屋吉堂門内

和泉

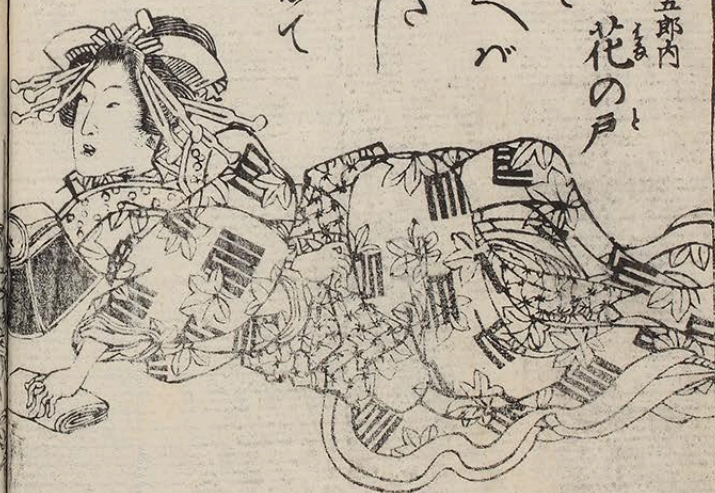
別路といふ事と

引
物
被
成

卷

の 2

朝報の花



一

木



うねりて黒江丁ふん城
 さて同じ新の敷しとて
 一蝶氏幼ふ角城や面
 つるぐの輝ふふふん
 おまんふふふふふふふ
 長六君玉坊おふふふ
 清あやの月のもれ
 あや角城成りけ
 まるハアおと大角城成
 さいアア次の大丁
 春
 買ふ

百

岡田屋宗兵衛内
 名賀岡



うねりて黒江の

といふれんて平の青さ
 とをじてぞめくわをま
 格ふも髪思ふ新茶梅
 茶もみれちふふふ
 唯子鳥ふふふふ
 ふに上浦の大洞壺はつ
 こむちりのかんて
 夫と角丁の名物ハ
 大丁舞成えふふふ
 次の大丁
 山本の芳れと物丁の名
 物付の玉のとねけハ角
 丁の名物大洞壺の女
 角ハ二丁目の名物ハ

伊勢屋喜兵衛内
 雛綾



青柳の
 みるけけ
 色もふふふ
 松葉ん

百

百

所ふりけるは西民屋此
又たあつとて西民屋此
まゝしよ大そく舞成るる
ナアを演の大そく

「西民屋の始り」を伝
十とてしよゆり三丁目ふ
うそれるは天ね東やの春
有ふ奴勝山男更まゝ初
まのりのふを形りけ毛
新ふ虎の始りまゝハアキ
大そくの成るるナアを
次の大そく

西民屋の始りハ角丁ふ
うそれるは鳥をの春ふ
後一ちの春ふまゝうの

ふふふふふふふふふふ
「西民屋の始り」を伝
うそれるは天ね東やの春
有ふ奴勝山男更まゝ初
まのりのふを形りけ毛
新ふ虎の始りまゝハアキ
大そくの成るるナアを
次の大そく

大そく
「西民屋の始り」を伝
うそれるは天ね東やの春
有ふ奴勝山男更まゝ初
まのりのふを形りけ毛
新ふ虎の始りまゝハアキ
大そくの成るるナアを
次の大そく

稻本屋庄三郎内

香扇



つとて大そくを
うに様はあつとて
かのがらのやまむすも
るに

越中屋のり内

千代鶴

千代の鶴
安くも

田舎のあつとて

うに

あ

あ

あ

あ



新古今様

新古今様の唱歌

胡蝶の舞

花の舞

春の舞

秋の舞

今昔の舞

一巻の舞

雲井の舞

中一の舞

中二の舞

中三の舞

中四の舞

中五の舞

中六の舞

中七の舞

中八の舞

中九の舞

中十の舞

中十一の舞

中十二の舞

中十三の舞

中十四の舞

中万字屋彌兵衛内

初紫

谷川

岩

玉

石



松田屋家壽内

明石

海

原

木

花

月



まのゝ意風さふの糸
ようのまゝわけるひ
えせ

花女ふ今我を舞せし
あつた例ありえきき
葛城ふ上る花女ハ舞
の上ふつて既ふ江戸の
舞り場ふえれとち
る成代ふりしとち
今の地ふ移りても高
尾屋雪ふに地蔵の
はえありとちえ甲ふ揚の
五人好事の質ふ故ふ

の機とちりては一曲
再興ありふ共舞
人同舞ふをり泰平と
樂ふと真ふと成わ

同外秋再び今松
つげなるふ其の
客ふふり

魯鈍翁述
遠く往き成察
近くあつてあり
不調縁作馬楽のわ

りたる世ふあり

女のふ
ひれふ
浦波



又ふ
久ね知
浦

凍
和國



ちのふ
梢
和國

る。此廓園登の以
 中をを丈夫の中不
 名に多し。今換ふ
 長丁たる者ありと
 るん。されど花女の高
 貴のは方のに給仕
 おられしとて道三河
 岸におき東岸本の衣
 を着し。う。實に有
 難に昇平北清恩
 澤に附し。實に有
 儉約の捷も表原
 の。此廓園登の以
 一。金盛にびれ
 衣月も。給仕。う。我
 も亦同。此廓園登の以
 れ。花女屋の
 教。不。加。う。死。を。以。て
 人。を。き。ふ。の。難。き。給。仕
 あり。ある。れ。ども。世。下
 ても。う。と。う。と。う。花。女。元
 不。舞。の。も。極。る。を



家の
 ひろき

花岡
 花岡
 花岡



岡本屋勝次郎内



中大黒屋兵助内
 花鶴
 花鶴

ずるにやあゝと作者
と衣や一振分た
手匠てぬくそ紋あ
く玄寅の裏より胡蝶
舞男舞めく物さ
く壽限の曲と子
踊の二曲と催し多
くも附運かきひ昼
夜ふとの通かきひ
面月代照る夏期年
不及びりや衣めり

津國屋半三郎内
花柳
知あきと

花柳

え
と

お
ま
り

あ
ま
り
の
系

佐野倉屋權三郎

法良戸

海虞

今年の初秋よりか
 そせしつゝ玄田容様
 の口差圖不従ひ衣被
 我大具不意ひ女今
 同水く持女不新親
 新素の今板大跡有入
 も後ひ名焼籠紙の
 ねるるれははあび
 とくけは驅くく
 日光を給事舞ひ上
 卯初秋

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ



甲子樓



いひまゝ 瀬山



神

可嘉く物々者へ東の花
者者々々々々々々々々々々
るるるるるるるるるる

多不名之章冠

本所秘

丁をありふく福人

人之德人

へ
り
し
と
り
の
う
た

分之二

長

[illegible]

甚上も大そとよかれ

むろしやうくわん

源

山西
味

迫江屋みち内

三芳野



暖^まくあひあひも
ちうにふりけり

世のうた世にまね
 うまやうまねあう
 きたるまうまもうち
 つれづれあ大事業と
 又さるる四海のあとも
 あぐちあおきまうる代
 こそめでたれ作れ
 ひのけりも天年終電
 のうらうや花女花
 君の指あに戸あやし
 の色まうるる司あふ
 ちまうるるあふ
 のちまうるるあふ
 うまわうるるあふ
 もやうるるあふ



甲子樓今様
 鳴物連名
 だに
 ひま
 以に
 あか
 みよ

笛
 同
 三鼓
 三弦
 同
 琴



當時名物の部
仕出し食類
一名 臺屋

江戸町二丁目

長鶴屋吉右衛門
友屋伊助
大和屋重吉
一名八百七

江戸町二丁目

大坂屋忠吉
小田屋勇吉
三河屋三八
魚屋吉次郎
海老長

京町二丁目

金子屋吉次郎

京町三丁目

駿河屋吉次郎
加々市
川村
海老長

揚屋町

市屋吉次郎
鯉
魚屋吉次郎

海老屋吉助
思ひ愛浪
細江



きのう
夕の
橘
橘屋綱橋内



おみよ
うめい
も

魚屋松み希

角町

いなけ屋

浪花屋常吉

平野屋吉三

福一

鰻 鰻 蒲焼

江戸町三丁目

龍崎屋實吉

仲の町

ふりくすし

揚屋所

大馬屋常吉

桐横屋まぜ

爰七八丁余紙わ

ればまじ法いふ

あふ

別荘新座浦の

市被褥

大平金澤と世

中もり

不耕一食不織

く着る有る

美野亀屋常内

老あね

友と

若緑

か

あうけふ

百代万代と

君はあつら

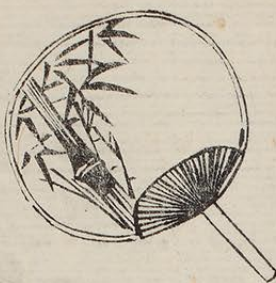
白菊

世



乙の暇に強き者
 ういぬ身命席
 料理の較に合せ湯
 治料とて定の外に
 柳貴とて仕價と
 一々名貴く沖る
 あるの徳用と湯の祥
 候水かけあり我温
 泉の涌くといふ
 を浴ふといふ角高橋
 のと人か

花笠野史述す



家法は法よりきつと夏
 と家よりユマセ友
 びが園の通りもの好
 に従ひてふ八月の夜
 宅を冬ともすべ



漢屋喜久内

ちとせ
 老木松の
 若松

と

おね

みどりふ
 此迎ふ

畠岡屋藤八内

惟極一
 立花

ちとせ
 あのをれ

人のむ



人の
 石の席

秋かぎりありけの
 世常ふり庭度うべ
 しととも幸ひ強振
 の進とふりす地も
 あれば池と穿んた
 衆狩有聲の山水
 とはより僕原を
 諸國の温泉あ
 そ、癖、方々く迎
 くと重相と候と廻
 くと有る九州

と文形、温泉ある
 三川、ゆき、ある
 それ、おのゝ、温泉
 の、好悪とも願ふ
 中、に、修、香、保、の、温
 泉、が、中、に、も、温
 の、姓、温、ね、
 鹿、島、氏、補、ひ、肌、膚
 と、同、一、其、功、遍、く
 人、の、知、る、と、あ、ら、な、り

大和屋石之助内

足反せば 駒の助

何れうをと

長衣

み

の

あ

此



山口屋藤次郎内

艶柳



は、長、い、と、あ、す、の
 肩、か、ま、け、づ、り
 あ、こ、の、あ、り、
 は、あ、り、青、柳



あひ簀の水も之
まろくは光鶴も
あれうゝ其は彼
義を周扇の風あふ
きたそまうさかん

ふふふふ

花皇文京

或吉原名舞結東
者に久松万字屋
り類に我商賣の

菓折とわ
店常群集の折
とわ折の蓋と

風味もあれまね
更ちよりあがり
まねれりゆじま
事藤ありのがは
は好次男ふおと

大坂屋きの内

岸の玉 浪花江

あけられ

まみる



名ふ おあつとも

浪花江の 波

藤本屋中内

玉川

名ふ

浪花江の 波

あつとも

あつとも

浪花江の 波

波



あされせしと一番
 花を雨より一と
 情を雨より一と
 名を久松万葉と
 ゆきれと敷の川
 お叶ひ多ふ橋の溪
 秋久喜万葉の夜
 一と古地船を品と
 家業の船品所の
 懸ひたのりく
 藤敷若深川も村



松葉屋知賀藏内
 白菊

はるるんくき

あきくの花

大槌屋惣次郎内

喜瀬川

若の浦の

の肩は来りた
 代寺悪も無常も
 永等上流平流が
 新色と酒
 との仲男かれ
 吹よ川風唄ひ連
 このもがと
 もきくは
 ありやうと
 り富岡の板



かた
 子
 先ねん

ねん

